

4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案(2) —実習生の指導計画を通して見えた幼稚園と大学の実習像—

A Tentative Program for University Students' Teaching Practice on
Early Childhood Education (2)
— The Image of Teaching Practice by Using Intern Students' Teaching
Plans at Kindergarten and University —

大井佳子*1、熊田凡子*2、向出圭吾*3

要旨

本学の幼稚園教育実習で試みた環境図で立案する指導計画は、保育者に求められる今日的課題と学生の現状を鑑みて考案した様式である。実習事後アンケート等に見える現場のもつ実習像と本学実習史料に見える実習内容の推移とを照合すると、大学の描く実習像と現場のもつ実習像に乖離があり、6領域から5領域への幼稚園教育要領保育内容の変換及び指導計画の捉え方の変化が実習内容に反映されていない問題が示唆された。

キーワード：実習生の指導計画(Intern Student's Teaching Plans)／
環境図(Environmental Figure)／実習像(Image of Teaching Practice)

I. はじめに

幼稚園教育実習は幼稚園と保育者養成校との対話の場である。保育者養成における現場での実習について、保育士資格に関しては厚生労働省雇用均等・児童家庭局通知で「保育実習実施基準」が、また全国保育士養成協議会から「保育実習指導のミニマムスタンダード」が出されており、共通基準を設けて質を高めるといって方向で模索されてきた。一方、幼稚園教育実習はその内容を養成校に任されている形である。地方大学は、地域の保育者養成という機能に留まらず、地方大学ゆえの研究的機能を有している。大学の養成プログラム、その一環としての実習プログラムというのは、その大学が地域の幼児教育の現状と課題をどのよう

に理解しているかの研究報告でもあると言えよう。

筆者ら大学の实習担当者は実習を含む養成プログラムの見直しを重ねるわけだが、その際に、目の前の学生たちをどのような保育者として現場に送り出したいと願うのか、めざす保育者像が織り込まれていく。学生の状況、幼稚園教育要領をはじめ新規の法令や提言に映し出される子ども・子育てを巡る動向、当該地域の保育の現況とニーズ等を読み込んで描く保育者像である。地域の現況やニーズは、実習巡回や現場との共同研究等で大学教員が現場と直接に関わり掴んだものである。地域との関係性の上をめざす保育者像を形成するのが地方大学の養成の特質と言えよう。具体的には、実習記録(日誌)や指導計画の様式、実習のために用意する遊びや教材、さらに実習後に園に依頼する実習評価など、実習を通じて現場に持ち込まれる様々なものに、養成校として大学がめざす保育者像とその養成イメージが込められているということである。

本学では、4年間での養成の試案として、入学から3年次6月の幼稚園教育実習Ⅱまでの期間に4つのプレ実習を配置する段階的幼稚園教育実習

*1 OOI, Yoshiko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育原理、保育課程論、保育内容総論

*2 KUMATA, Namiko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育内容・言葉

*3 MUKAIDE, Keigo

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育内容・環境

プログラム¹⁾を作成、実践し、その過程で学生が見せた姿に応じて、実習記録と指導計画の様式、実習園に依頼する実習評価の項目と記入の説明を随時改変してきた。それに対して現場からは、実習巡回時の巡回教員への口答での申し出や実習後のアンケートへの記載、あるいは実習懇談会での発言の形で実習生と養成校の取り組みに対する意見が寄せられている。これらの意見には、幼稚園現場が意識しないままに描く実習像が織り込まれており、この実習像は実習生に対する日々の指導においても示されていると考えられる。

本稿は、実習生が立案する指導計画に着目し、筆者ら養成校実習担当者の実習像と幼稚園現場の実習像の照合を試みるものである。

II. 実習生の指導計画立案の目的

1. 本学の幼稚園教育実習指導における指導計画立案の位置づけ

実習生の指導計画というと、提供された時間をどのように進めていくかの予定、手順を書くものと捉えられていることが多いかもしれない。スムーズに活動を進めるための指導計画という捉え方は、Ⅲ章で見るように実習園から寄せられる意見にも散見される。現行の幼稚園教育要領解説は、指導計画について「・・・教育課程に基づいてさらに具体的なねらいや内容、環境の構成、教師の援助などといった指導の内容や方法を明らかにする」もので、「・・・一つの仮説であって、実際に展開される生活に応じて常に改善されるもの」と記している。これは、保育者が立てる指導計画のことであって実習生が立てる指導計画は名称は同じであっても別物なのだろうか？

出版されている実習・実習指導の教科書の多くが、実習の初めの期間に観察実習、続いて手遊びや絵本の読み聞かせ等の活動で部分実習をし、実習終盤で責任実習を行うと書いている。実習生であっても園の保育の流れに沿って担当する時間の指導を行うということである。保育における活動は、一定の時間幼児を楽しませるイベントとは本質的に異なる。幼稚園は私立が多く、保育の形態や方法は園によって多様である。実習園の保育者の「やり方」をそのまま身につけてしまうことは、幼稚園教育実習として不適切であるばかりか、保

育者に向かう学生の今後の学びの妨げとなることもあるだろう。もちろん保育者の動きをなぞって動いてみることで幼児と幼稚園教育に対する発見を得ることはある。Ⅳ章で見るように、昭和から平成初期の本学の実習指導にも「なぞる」指導が視られる。しかし近年の学生は、問題には正しい対処法があって、マニュアルとしてネット等で入手できると思い込む社会状況に育っている。モデルのとおり動く現場体験が学生にもたらすものに大きな危惧を感じる。では、どのような方法で実習すればよいのだろうか。

筆者らは、学生が保育の現場において自分で考え判断して動き、検証を通じて学ぶ実習が必要だと考える。そのツールとして指導計画を考えたいと思う。本学では、実習開始以前に、配属園の幼児の生活を想像して連続性のある15枚の指導計画を書く。3年次6月(場合によれば4年次)の15日間の幼稚園教育実習Ⅱの履修条件として、前年度2月に実習配属園5日間のプレ実習を義務付け、それ以前の配属園行事へのボランティアや4月以降の自発的な園訪問と併せて、指導計画に必要な情報を得よう奨励する。このように長期に渡って実習園の生活に触れ、自分なりにつかんだものを結実させる場が指導計画の立案である。実習の15日間を見通して15枚の指導計画を立てるには、園の一日の流れ、週の流れ、さらに月や期、年と長期に思いを巡らせる必要がある。実習園での体験を思い起こして不足を自覚し、補えるものは補って実習に臨む。指導計画の立案を通じて、学生は実習に向かう態勢を整えていくのである。

平成元年の幼稚園教育要領改正以降、幼稚園における幼児の指導は、「環境の構成を通じての指導」であることが明確にされてきた。指導計画については「具体的なねらい及び内容を明確に設定し、適切な環境を構成することなどにより活動が選択・展開されるようにする」と捉えられる。これは昭和39年幼稚園教育要領の「具体的な指導のねらいを明確に設定し、これを達成するにふさわしい幼児の経験や活動を選択して配列すること」という指導計画の捉え方とは異なるものである。保育内容を6領域で捉えていた時の指導計画では、ねらいの達成のために幼児の経験や活動を選択して配列するのは保育者であり、幼稚園であった。

それに対して現行の5領域で捉える指導計画では、活動を選択・展開するのは幼児である。以前には、「指導書」として用意された活動リストからスタートすればよかったが、今はそうではない。4年制大学の養成では幼稚園教諭一種免許状の実習である。実習生の指導計画においても、6領域での指導計画から5領域での指導計画への変遷の意味は大切にしたい。

「実習生が園の保育の流れを理解した指導計画など立てられるわけがない」という意見が現場から寄せられることがある。「立てられる」という結果を求めるのではなく「立てようとする」過程で学生が得ることを期待する方向目標としての目標設定である。幼児教育では到達目標ではなく方向目標で目標を立てる。保育者養成においても方向目標は必要だと考える。

近年の学生は、実習で現場に身を置きながら、担当保育者と自分との関係性に気をとられ、幼児や保育について見落とす傾向が少なからずある。担当保育者の目が気になると言うのである。評価で煽る社会の風潮と無縁ではないだろう。学生の目が子どもと保育に向くためには仕掛けが必要となる。筆者らは、仕掛けの一つとして指導計画の様式を捉えている。

指導計画の様式によって幼児と保育を見る視点を提起することで、学生の目の向かう方向を変化させようというわけである。実習開始より一定期間早く提出される指導計画は、筆者ら実習指導担当教員によって添削されることはない。指導計画を「書く」練習なのではなく、指導計画を「立てる」過程が学びだからである。ただし、提出される指導計画によって実習生一人一人が実習園の保育と園児をどのように理解しているかが見えるので、理解と準備の程度によって個別に補習的学習課題を用意し、場合によれば実習の取下げを学生と協議する。

2. 環境図で立てる指導計画

2014年度、本学の幼稚園教育実習Ⅱ(3年次6月15日間)に向かう実習指導では、環境図を中心にする指導計画の様式を試みた。現行の幼稚園教育要領が示す「環境の構成を通じての指導」のための指導計画なので、遊び・活動のプランを環境図に描いて考えるのは自然であり妥当であろう。

環境図での指導計画の導入に先だって、2014年度幼稚園教育実習Ⅱ履修の3年次学生は、1年次のプレ実習以来、記録の様式の一つとして環境

遊びのプラン (注: ね子ども) 資料5

(例) 大きな紙? 折る 紙風船 風船 水風船 トランポリン はずむ パラバルーン

(例) 遊びの提示 遊びの展開 遊びの発展

事前準備
配慮事項
後片付け

実習生の記録を貼付け

実習の用紙サイズはA3

記録用紙
月 日 () 園児 クラス名: 幼児数: 名前

指導のねらい
この遊びで子どもは何を楽しみ、それは子どもにどのような発見や学びをもたらすのかを簡潔な視点として書きます。

環境図 教師の動き・予想される子どもの姿

自らの指導計画について、子ども集団全体に目と心を配ることを意識する方法として、環境図で指導計画を立てます。

子ども一人一人を書き込み、実習生と教師の位置と動線を書き込みながら、自分が何をやるかではなく、クラスにとってはどのような時間になるのか、イメージを膨らませる作業です。

幼稚園との事前協議を通じて書き直したり、書き加えたりするワークシートです。

この環境図での作業を通じて、準備物や配慮事項、時間配分についても考え、メモしておきます。

時系列への展開
1 時間の流れを数直線に書きます。

(例) お片付け ⑤はイスを並べる

図1 環境図で立案する指導計画の様式

図を用いてきた²⁾。それは実習生が苦慮する「個と集団」を見るためのツールとして環境図が有効と考えたからである。環境図で記録を書くことによって自分自身を含む場として保育を俯瞰することが習慣付き、目の前の子どもとかかわりつつも背後を含めて周りに注意が向くようになると期待しての導入であった。ディスプレイ画面やフローチャートなどを見慣れて育った世代には図的表現は馴染みやすいようで、言葉による表現ではどこかで見た文章をそのまま記す学生が少なくないのに対して、環境図ではその学生らしさの感じられる表現が多く見られ、読み手に伝わるものも大きいように感じられた。

指導計画を環境図で書く過程は、頭の中の遊びのイメージ、保育の展開のイメージを見える化する作業である。全体を見渡して書き込むことで、拡散しているイメージが構造化されていく。指導計画は、考えた結果を清書する用紙ではなく、考える過程が画面上に見えるワークシートとなる。環境図での立案は、本学の学生が相対的に得手とする情報処理のスタイルに合っているかもしれないと考えての本年の試行であった。試みた指導計画の様式を図1に示す。「自らの指導計画について、子ども集団全体に目と心を配ることを意識する方法として、環境図で指導計画を立てます。子ども一人一人を書き込み、実習生と教師の位置と動線を書き込みながら、自分が何をするかではなく、クラスにとってはどのような時間になるのか、イメージを膨らませる作業です」という説明と記載例を書き入れてある。

保育形態が実習園によって様々であることをふまえて、指導計画は一斉活動・設定保育だけでなく、自由遊びや食事後の短時間、バスを待つ時間や預かり保育の時間など実習園の生活の流れに沿って遊びを想像し、その園の子どもたちとしたい遊びを中心に置いて遊びのプランを膨らませ、指導計画へと展開していく。「この歌の歌唱指導を」というように実習園から実習課題の指定がある場合には、歌詞を題材にして視聴覚教材を作成するなど歌の伝え方を工夫する、あるいは歌を使った遊びを考えるなどして、園から与えられた活動を実習生の連続した15枚の計画の中に組み込んでいく。

実習指導の授業では、グループ討議で質問し合

い助言し合って指導計画の書き加え書き直しを行う。15枚の連続した指導計画立案は一見困難に見える課題である。「できない」という思いから始まる挑戦によって、思いもよらない閃きに自分を再発見し、自分なりの工夫の楽しさを体験する学生が少なくない。これは、幼児が幼稚園での遊びを通して体験することと重なる。幼稚園教育実習を断念した学生が、同級生たちの実習準備の姿に触発されて翌年の実習を希望する姿もあり、幼稚園で難しいことに挑戦する友達の姿を見ているうちにできないと思っていた遊びに入っていく幼児の姿に重なる。各自のイメージが見える化される環境図での指導計画は実習準備を介した学生間連携にも貢献するようである。このような学生間連携は、保育現場で求められる協働や共同研究につながる経験である。保育者になれば、チーム保育のパートナー、園の保育者や保護者、さらには園外に向けての社会的発信として、自身の保育について説明し、イメージを他者と分かち合い、他者の考えをもらって自らの考えを再構築していくことが求められるのである。

指導計画は遊び・活動のイメージを表現するツールである。他者に伝わりやすいように方法は様々な工夫されるべきである。例えば、昨今の学生には日常アイテムである写真、動画の活用である。伝わりやすく工夫された指導計画になれば、実習生の指導計画は、園が書き方を指導する対象などではなくなり、遊び・活動の協議のツールとして活用されるだろう。幼稚園と実習生の協議のスタートに実習生の用意した多数の指導計画が置かれ、担当保育者から質問や情報提供がなされ、実際に実践する遊びを選択し、協議を通して計画が練り直される。実践での検証を経て得た気づきによって次の指導計画が変わり・・・と実習が進むようになってほしい。協議を経て、実践の直前に時系列で書いてみる必要がある学生もいるだろう。実習園で保育者が用いている書式で書くことが有効な場合もあるだろう。いずれにしろ、学生自身が自分なりに考え抜くことが前提であって、その上に展開する協議によって、この幼稚園の子ども、この幼稚園の保育を見る視点が学生に定まってくると考えられる。学生が実習開始前に作成した指導計画の一例を図2に示す。

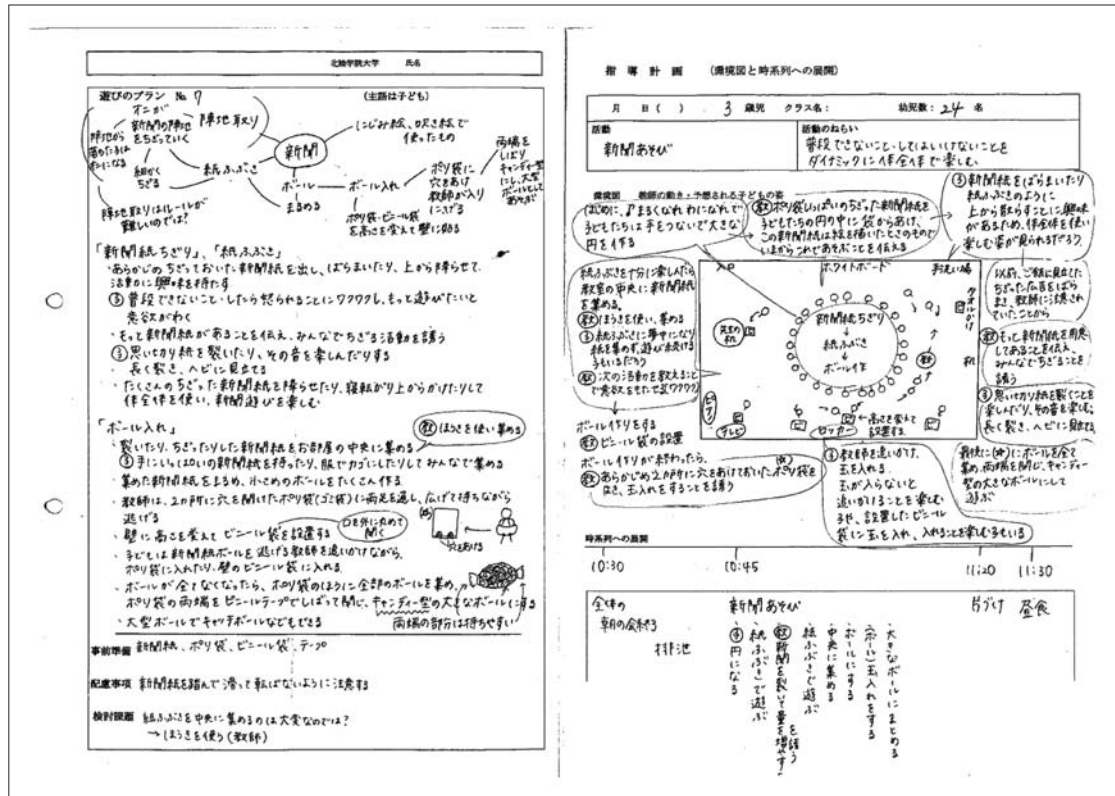


図2 実習開始以前に立案した学生の指導計画例

Ⅲ. 本学の実習に対する実習園の捉え方

1. 実習事後アンケートに見る実習園の思い

幼稚園教育実習終了後、各実習生に対する実習評価の依頼とあわせて実習に関するアンケートを実施している。本章では、2014年度の幼稚園教育実習Ⅱで回収されたアンケートの記述から、今回初めて指導計画に取り入れた環境図での指導計画について実習園はどのように捉えたかを探ることとする。2014年度幼稚園教育実習Ⅱでは49園で、3年生51名、4年生17名、科目等履修生2名、計70名が実習した。アンケートの回収数は43園で、回収率87.8%であった。アンケート項目は下記の3点で、自由記述による回答である。

Q1 実習生について

- ①問題と思われたことがございませんでしたでしょうか。
- ②良いと感じられた点がございましたでしょうか。

Q2 実習生の立案した指導計画について

実習園での保育を想定していくつもの指導計画を書いてみることを学生に課しております。設定されたクラスの活動だけでなく、自由遊び等

での遊びの提案も指導計画として考えます。事前学習として立案してみた指導計画をもとに、実習開始後の体験と先生方からのご助言を得て実習で実践させていただく指導計画を再構成します。学生の指導計画立案について、お気づきのことがございましたらお書きください。

Q3 その他、本学の実習(プレ実習)についてのご意見をお書きください。

Q2の回答を①事前指導計画立案に対する実習園の理解と②事前指導計画立案の学生にとっての意義の二点について検討した。

①本学の事前指導計画立案に対する理解について分類した。

- ・理解されている 28園(回答園の65.1%)
- ・検討の余地がある 6園(回答園の14.0%)
- ・その他 4園(回答園の9.3%)
- ・回答なし 5園(回答園の11.6%)

※その他とは、記録等指導計画立案以外

「理解されている」と分類した回答の回答例を挙げる。

- ・一つのテーマをもとに立案していた事、また事前に内容を深く考え立案していた事は実習の中で指導していく上でよかったと思う。また何パターンも考えることが学びになり、その中から保育の中でできることを選べたのもよかった。計画をしっかりと立てているので、全体にも目を配る事が出来ていたと思う。
- ・最初は学生にとって難しいのではと思ったが、予測を立てる練習としては良い方法だと思う。他の学校と比べ、いろいろな視点から子どもの姿を想像し考えるきっかけになるような指導案の構成になっていると感じる。
- ・指導計画を様々に立てて、事前に準備し写真などを利用して提出するのは良いと思う。
- ・他の大学とは違った書き方で、最初はその読み取りに職員が戸惑ったようですが、細かく書かれており、実習生の記録により自分のクラスの振り返りになり勉強になった。

「理解されている」と分類したものの内17園(回答園の40%)が環境図について記している。回答例を挙げる。

- ・環境図があることで、見ている子どものようすや関係を見ることができていたように思う。
- ・環境図で指導計画を立てることの良い点は、振り返りにおいても文章で表すよりわかりやすいと感じた。環境図の作成で、準備物などや子どもの誘導に関する点で把握できていて良いと思う。
- ・環境図で表すことで教師の立ち位置、活動する場所の広さなど、どのように設定すればよいのかが明確になり、全体に目を配ろうとする姿勢がみられた。
- ・環境図で計画を立てることで、子どもたちの動線をあらかじめイメージで実践できたのではないかと。実践後に自分で振り返りを行うことで気づきや課題が見え、次の実践に活かすことができていた。

「検討の余地がある」に分類した回答例を挙げる。

- ・実習前に指導案を書き、実習前に提出されたが、全くクラスに入らず、子どもの様子を見ずに指導案を作成することは難しいと思う。
- ・事前学習として立案された指導計画は、あまり年齢に適したものではなかった。詳しい言葉掛けを指導案に書かないのは疑問に思う。
- ・指導計画に具体的な言葉掛けや工夫を考えて書き込まなければ、本人の思い描く指導計画の実践には結びつ

きにくいのではないかと。

実習生の事前指導計画立案に関しては、半数以上の園が理解を示していて、その多くは連続性のある多数の指導計画と、環境図を用いて立案されていることに意義があると述べている。連続した計画で提示されることによって、実習生の考えが担当保育者に理解されやすくなり、実習生に対する指導がしやすくなるようである。さらに環境図を用いることによって、子どもの動線、保育者の立ち位置など実習生の計画の具体的な内容を担当保育者がイメージしやすいという利点もあるようだ。一方で、実習前の立案は実習園の子どもや年齢に適したものか想像できず実習生には難しいという意見や、詳しい言葉掛け、あるいは具体的な言葉掛けが記述されていないことを不満に感じるという意見もある。

次に事前指導計画立案が実際に実習生の学びになっているかを見てみる。

②実習開始前の指導計画立案の実習生にとっての意義について分類した。

- ・学びになっている 22園(回答園の51.2%)
- ・あまり学びになっていない 12園(回答園の27.9%)
- ・その他 4園(回答園の9.3%)
- ・回答なし 5園(回答園の11.6%)

※その他とは、記録等指導計画立案以外

「学びになっている」に分類した回答例を挙げる。

- ・とても細かく立案されており他の学校の計画の立て方とは全く違い、工夫や改善が感じられた。
- ・実習前に全ての課題に対して細かく指導計画が立てられているのは、とてもよかった。さらに実践を通して今現在指導しなければならない子どもたちに合わせた内容に再構成できた。
- ・指導計画がとても見やすかった。しっかり環境設定を図にして表していて予想される子どもの姿も書いてありわかりやすかった。
- ・とても細かく書かれており事前に想定しながら立案されているのが感じられる内容だった。

「学びになっていない」に分類した回答例を挙げる。

- ・環境図によって準備物の配置はスムーズに行われたが、

遊びのプランの流れがわかりにくいため、時間配分や子どもの動きを想定して計画を立てると良いと思った。学生自身把握していない。

- ・事前に計画を立てるということも大切だが、それを基に再構成していく力も大切だと思う。
- ・何度も立案されたとは思えないほど簡単な内容のものが多かった。細かなところまで計画し記入されるとよいと思う。指導計画の書き方を実習生自身が理解できていない部分があり戸惑っていた。指導計画の内容や書き方を検討されると良いと思う。

「学びになっている」「学びになっていない」の回答例を見ると、実習生の指導計画立案の力量が関係していることと合わせて、事前に立案した指導計画を実習中にいかに改善、再構成できるかが問われていることがわかる。つまり現場が学びになっていると判断する基準は、事前に立案した計画を見直していく過程にあるようだ。一方、担当保育者との協議を通して見直しに対処できない学生に対して、事前の立案は学びになっていないと映るようである。

以上の整理から、次のようにまとめることができるだろう。

本学が試行している指導計画は、学生が計画をしっかり立てている場合には、現場の保育者が事前の協議において指導しやすいものとなる。数多く立案することで学生にとって多視点で保育を考える機会となっている。特に環境図による指導計画は、幼稚園現場にとってこれまでの実習になかった書き方として受け入れられ、図式化は現場の保育者にとっても計画を把握しやすいと感じられている。環境図による指導計画を自分なりに使いこなす学生が実習した園ではこの様式に対する理解と合意を得たということであろう。

一方具体的な言葉掛けについては、指導計画に書くことで、言葉で子どもの活動を誘導しかねないという今の学生の傾向に対する危惧があり、実習指導では勧めないようにしているのが実際である。いつでも子どもの動きによって計画変更できるようにしておく余地のためには、言葉は書かない方がよいという判断である。子どもの姿を見ないで指導計画を立てることに対する指摘があるが、

前年度2月のプレ実習で実習園を体験し、学生は園の様子、子どもの姿を知っているため指導計画を立案するための情報を持っていないわけではない。ただ、それを指導計画に反映できない学生もいるのは確かである。

2. 幼稚園現場と養成校との実習生に対する認識の違い

今回の事後アンケート「Q1実習生について」の回答にもあり、実習事後懇談会でも出された要望として「挨拶、言葉づかい、身なり、所作、元気がない、積極性がない、時間厳守、誤字脱字」等、社会人としての基本を身に付けて学生を送り出してほしいという意見がある。一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会がまとめた『平成25年度専門委員会課題研究報告書(第2報)』(2014)³⁾によると、幼稚園教諭と保育所保育士は養成校に対して「基本的なマナー、基本的な態度そして発達理解などの基本的な知識を習得し発揮することを求めている」というアンケート結果が報告されている。このような現場の認識に対し、同報告書は「実習生自身が課題を見出し追究しようという意識をもって実習に臨むことが保育現場の認識を変える一つの手段である」と述べているが、現状の実習期間内だけでは実習生はやらなければいけないことを消化するのに手いっぱいである余裕が感じられないという。そこで実習以外の現場体験学習を1年次から継続して重ね、実習生に学び続けようとする意識を持ち続けさせる養成校の実習指導が重要となるのである。本学が試行している事前指導計画の立案、入学から3年次6月の幼稚園教育実習Ⅱまでの期間に4つのプレ実習を配置する段階的幼稚園教育実習プログラムなどはその具体化と言えよう。長年にわたって保育者養成を担ってきた2年制の養成カリキュラムでは、この継続した現場体験学習を重ねることは難しいであろう。その意味で4年制の養成校が担う役割は大きいと感じるところである。

IV. 本学の幼稚園教育実習の史料からの検討

1. 6領域時代の実習と5領域時代の実習⁴⁾

本学は、短期大学(1950年～2009年)から4年制大学(2010年～)に移行して保育者養成を継

続してきた。幼稚園教育実習及び保育現場との協働に何か変化があったのだろうか。本章では、短期大学時代から現在に至る実習への取り組みの変化を検討したい。

幼稚園教育要領が示す保育内容が6領域であった時期が長いわけだが、その6領域時代の本学の実習については、1970(昭和45)年～1971(昭和46)年度の史料と当時の学生であった二人の卒業生からの聞き取り⁵⁾から検討した。本学に保管されているシラバスは1990(平成2)年度以降で、それ以前の授業内容を明確に示すことは困難である。資料の収集にも限りがあったが、6領域時代の史料として、当時「保育学」の講義を担当していた南信子自身が書いたノート「南信研究ノート115(昭和46年度)」及び「南信研究ノート117(昭和45・46年度)」(北陸学院ウィン館「南文庫」所蔵)と、卒業生 虹釜和子氏(北陸学院保育短期大学保育科21回生)と佐々波秋子氏(北陸学院保育短期大学2回生、昭和45・46年度専攻科生として付属幼稚園に勤務しながら学ぶ)が保管していた「保育学」の受講ノートの閲覧を得た。この講師と受講生のノートには同じ文章が書かれている箇所があるので、その部分を抜き出してみる。(太字の表記は筆者 熊田による。)

「カリキュラムには、経験活動と指導の内容に加えて、次の事が考えなければならない。環境構成、形態、指導の技術、両親教育あるいは家庭との連絡の問題である。」環境構成では、「できるだけ刺激を少なくし、しかも幼稚園生活に興味をおこさせる環境を整える。装飾、ボードの製作、美しい絵の添付等、季節の子どもの興味にふさわしくする。所持品整理の為に目印となる形、模様、印等をつける。4才の場合には少なくともクラスの保育室とその名前、自分の所持品を整理する場所と名前、子どもの椅子、机等があれば、それに名前をつける。自然界の動植物を室内にとり入れる。例えば、花、小鳥、植木ばち、ある物には名前をつけておく方が良い。遊びを誘う様な教材、素材、玩具等の設定。」保育形態では、「個人が自由に活動できる様な活動を十分に重んじ、個人指導ができる様に短い時間集団行動一斉保育にも参加させる。」指導技術では、「個人差、特に子どもの発達、興味、能力を捉える教師の理解と愛が大切で

ある。望ましい行動に変様させる事の出来る**技術**が大切である。全体を統一する司会の**技術**、子どもに友達を作ってやる**技術**、子どもに信頼感を与える教師の**態度**、声の大きさとか適切なことば、**行動**の敏捷さ、子どもの活動の**させ方のこつ**が熟練しなければならない。」日案については「時間を配分する、環境構成、教材、形態、指導の留意点、個人指導の必要、経験活動の分類」

太字の言葉が示すように、当時「保育学」を担当していた南信子は、保育者の行動に重点をおいて指導をしていたと考えられる。「経験活動と指導の内容」を計画するために、「環境構成」では何をどのように整え設定するのか、「指導技術」ではどのような態度や行動が適しているかというように保育者の技術を身に付けることを学生に求めていたようである。

また講義だけではなく、観察実習を通して保育者の行動や技術を実習園における保育者の姿から学んでいたことを二人の卒業生は語っている。(太字は筆者 熊田による。)

虹釜氏によれば、「2年間の学びのうち1年次では、ナースリースクールと付属幼稚園の観察レポートが課題であり、先生の様子を記録し、先生が子どもと関わっている時はその話し方や関わり方を書いてきた。その他には、保育室の環境を書いてレポートにしていた。また2年次では、4月～7月まで(4か月間)付属園と協力園で週の半分は実習を行っていた。当時は、指導計画などの様式はなく書いていない。保育中の先生のやり方をよく見て、実習が慣れてきたころに、**集合**や**社会研究**のお話をさせてもらった。**集合**は、朝の自由遊びが終わって集まり朝の挨拶をする時間を、クラスの先生がいつもしているように実習した。**社会研究**では、4月から7月まで期間が長いので、実習生はその間の季節に応じた**社会研究**のお話をしていた。**集合**や**社会研究**をするときは、クラスの先生の真似をしてできるようにメモなどを用意させてもらうこともあった。」また、佐々波氏によれば、「私の短期大学保育専攻科生時代では、保育の授業では、カリキュラムについての勉強をしたが、指導案を書いて実習を行うことはなかった。実

習では、付属幼稚園の子どもと教師の姿から学ぶことに徹底していた。また、実習園の教師をモデルとして見て学ぶことが大事で、実習園の立場から言えば、担当の教師は見せてから、実際にさせてみる、という実習であった。集合の場面や社会研究、自然観察のお話は季節に応じた社会の出来事や自然の様子について教材を用いて話すことが実習の主な内容であった。学生が指導案を書くという事はなかったが、付属幼稚園では、教師が日案を書いており、時間を配分し、経験活動の内容、形態、指導のねらい、環境構成と教材、を項目で分けていた。」ということであった。

当時与えられた実習内容は、『集合』や『社会研究』、『自然観察』という保育者が子どもを集めて話す活動であり、話し方などの技術は、保育者の姿をよく見て学んでから実践していたと考えられる。また、実習園では日案として活動内容を時間ごとに配列して書いていたようである。

社会研究や自然観察という活動は、当時の幼稚園教育要領の「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の6つのうちの領域名を用いたもので、「社会」と「自然」の領域の活動として『社会研究』と『自然観察』が保育に取り入れられていたのではなかろうか。当時の幼稚園教育要領の指導および指導計画作成上の留意事項によれば、「幼児の経験や活動のまとまりを、いわゆる主題や単元として指導計画を作成するときは、第2章の各領域に示す事項を取り落さなく指導することができるよう配慮すること⁶⁾。」とあることから、6領域に対応した活動を配列して保育が展開されていたと考えられる。ただし、「社会研究」については当時の「幼稚園教育指導書領域編自然」の基本方針に「自然および社会の事象について興味や関心をもたせ、思考力の芽ばえをつちかうようにすること⁷⁾。」と記されていて、領域「自然」の活動である。

まとめると、6領域時代の実習は、保育者をモデルとして話し方や姿勢や子どもとの関わり方を模倣してやることであり、実習の内容は『集合』『社会研究』『自然観察』という子どもの前で話をする活動であったということが考えられる。

次に、6領域から5領域に変わった時期にはど

のような実習をしていたのかを見る。その時期の史料として、幼稚園教育要領改正から2年後1991(平成3)年当時の学生の「計画レポート」があった。「計画レポート」は、学生がする実習の計画であり学生には指導案と呼ばれていたようである。図3は当時の教育実習における責任実習の指導案である⁸⁾。

時間	内容	導入 展開 発展
8:30	自由遊び	・あまごころ ・アロワ、積木
9:30	・おひなげ ・来賓 ・手遊び	
10:00	・お話し ・お話し ・お話し ・お話し ・お話し ・お話し ・お話し	「うさぎはして引いて 123、うさぎはして引いて 123、…… 123、うさぎはして引いて 123、…… 123、うさぎはして引いて 123、……」 はあはあ、うさぎ、うさぎ早く、うさぎに足も17かき。 おひな人形で、一人ずつ名前と書く。 あひながある前、あひながある前、うさぎと遊ぶ。 御座、うさぎで、お話しに行く。
10:15	・礼拝 お話し	お話し「うさぎはして引いて 123、うさぎはして引いて 123、…… 123、うさぎはして引いて 123、……」 お話し「うさぎはして引いて 123、うさぎはして引いて 123、…… 123、うさぎはして引いて 123、……」
10:20	・静的游戏 ・静的游戏 ・静的游戏	お話し「うさぎはして引いて 123、うさぎはして引いて 123、…… 123、うさぎはして引いて 123、……」 お話し「うさぎはして引いて 123、うさぎはして引いて 123、…… 123、うさぎはして引いて 123、……」

図3 1991(平成3)年当時の指導案

上記の指導案では、「時間」と「内容」、そして「導入」「展開」「発展」として学生が自分の担当する実習内容を記しており、どのように実習を進めるか、保育の流れを書いたものであると考えられる。また、実習内容の中に、『集合』『自然観察』『静的ゲーム』等があり、集合と自然観察は前述したものが継続されていることがわかる。『静的ゲーム』という言葉は、6領域であった幼稚園教育要領の「指導における留意点」にある「幼児の経験や活動にあたっては、静的と動的、屋内と屋外、個人とグループなどのいろいろな経験や活動をかたよりなく指導できるようにすること」という指導のあり方に応じた「動的」「静的」な活動に由来するものであろう。幼稚園教育要領は5領域になりながら、実際の保育においても実習においても6領域の活動が続いていたと考えられる。

2. 幼稚園から与えられる実習課題⁹⁾

実習生に対して実習園からはどのような課題が出されていたのかを見てみよう。2001(平成13)年の幼稚園教育実習の指導案(図4)で見てみたい。左上に書かれた『社会観察』が実習園から与

指導案 社会観察「ゴミ」(についての話)		実習生氏名	
6月8日 金曜日		組当 3歳児	男 6名 女 14名 計 20名
幼児の姿 先生が「ゴミを拾ってね」と言うと、子供達が見られる。		ねらい ゴミがあったらどうすれば良いのか、どんな気持ちになるのかを一人一人考え、イメージする。	
時間	幼児の活動	環境構成及び留意点	
	<ul style="list-style-type: none"> イスに座る パネルシアターの方を見る。 「ゴミ」と答えるもいる。 「ゴミは悪い」などの答えが来る。 「イヤだね」などと言う。 「ゴミ箱に捨てよう」と言うもいる。 パネルシアターの方を見る。 「悪い」と答えるもいる。 「ゴミがないが見る。 	<ul style="list-style-type: none"> 礼拝の時のように座る。 ゴミが落ちていく戸を表現したパネルシアターをみる。 「これは何だかと思う」と言ってパネルシアターで見たゴミを見る。もし、答えがわからなかったら、「これはゴミだよね」と言って避ける。 「このゴミがどこに落ちたのかお部屋にもたくさん落ちていたらどうかな」 「落ちないわ。もし、ゴミが落ちてお部屋を遊んでいて、ゴミを踏んでしまったら、靴を踏んで汚れる(歩かないよ。そうしたら痛いよね。みんな、みんなのイヤだねわ)」 「はい、このたくさんおちているゴミはどうすればいいかな」 「(うたが)ゴミ箱に捨てておくれいよ。こずつ捨てていくわ。」と言ってゴミ箱の中(ゴミ箱)に捨てていく。 「ゴミがなくなったらどうかな?きれいな?」 「きれいだと気持ちいいわね」 「このお部屋にもゴミが落ちていたら、お友達がかかさないように、ゴミをゴミ箱に捨ててね。」という今度は本物の紙かきなどのゴミを見せる。 「あ、みんなのまわりにもゴミが落ちてないか見てみよう」 	
	<ul style="list-style-type: none"> 「はい」と言うもいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「大丈夫だね?もし見つけたらお友達がいいたら、ゴミ箱に捨ててきてね」 	

図4 2001年指導案

えられた課題である。6領域時代に起源がある活動が引き続き幼稚園から実習生に課題として出されている。同じ幼稚園で実習した今年度の指導計画が図5である。(右頁上段図参照)

2001年では『社会観察』(左側上段)、2014年では『静的ゲーム』(左側上段)と書いてある。今年度実習した学生からは、「静的ゲームとは何でしょうか」と質問を受けた。学生にとっては、自分だけが知らないゲームの名称なのかと捉えて筆者らに質問してきたのである。このような活動について筆者らは、歴史的事項として学生に伝えることであると考えていた。実習(活動)に対する養成校と実習園とのギャップを示す一例であろう。現在、現場では、6領域時代の領域に対応した活動をそのまま使用することはないのではなかろうか。にもかかわらず実習生へ与える課題として提示し続けているのかもしれない。

3. 実習生が自分で選んだ実習活動

実習園から課題を出されない場合はどのような活動で実習をしてきたのであろうか。平成元年以降の実際に実践した実習指導計画を資料に考察する。本学は、短期大学として養成を開始した1950年以降58年間にわたってキリスト教幼稚園のみで実習を行ってきたが2008(平成20)年度より、キリスト教幼稚園以外の幼稚園での実習を始めた。それまでの実習では実習園より課題が出されて応じる実習であったが、実習生に対して課題を出さない園も見られるようになった。

課題が出されない場合、学生は自分で考えた活動や大学で学んだものから選んで計画していくことになる。実習生に課題を出さない園で実習した指導計画について調べてみた。図6は2008(平成20)年に実践されたものの一例である¹⁰⁾。

指導計画の様式から見ると「子どもの活動」「保育者の援助・留意点」「言葉かけ」「環境構成・準備物」を学生が書き込むことになっている。「言葉かけ」の欄は、保育者の話し方を子どもを促す方法として書いていたようである。実習指導では「言葉かけ」を重視し、言葉で促す、進める方法を学んでいたのではなかろうか。

園からの課題は出されていないが、活動内容には「リズム活動」と書いてあり、学生が自分で準備する際も、6領域時代の活動、この場合は領域「音楽リズム」に応じた活動になっていたのではあろうか。

短期大学から4年制での養成への移行において変化があったのかを4年制大学第一期生の幼稚園教育実習Ⅱ(2010年)において実践した指導計画(図7)で確かめてみた¹¹⁾。図6の幼稚園と同じ園で実習したものである。

活動の内容を見ると、「まっかな秋を歌う」「体操できるかな、をする」「フルーツバスケットをする」というように6領域時代に使われていた領域につながる活動名称は見られない。様式としては「言葉かけ」欄といった枠がなく、予想した実習生・子どもとの関わりや動きを書くように改善された指導計画となっている。また、学生が「子どもの反応から学んだこと」を書き、子どもの内面の動きを読み取ることを目指した実習指導であったと考えられる。しかし、実習生の行動とし

指導計画 (部分実習) 実習生氏名 ()		指導計画 (部分実習) 実習生氏名 ()	
2014年11月29日(日)	5歳児36名	教員教諭	
<p>目標の子どもの様子 歌を聴いて歌う姿が、自分の伴奏を自分伴奏で歌って音に合わせている。 歌の進行を自分の歌の進み具合に合わせて歌っている様子が見られる。</p>			
<p>活動内容 ①おはな歌を歌う ②おはな歌の歌詞を覚える ③おはな歌の歌詞を覚える</p>		<p>(教材) ①おはな歌のCD ②おはな歌の歌詞カード ③おはな歌のCD ④おはな歌のCD</p>	
<p>活動のねらい ①おはな歌の歌詞を覚える ②おはな歌の歌詞を覚える ③おはな歌の歌詞を覚える</p>		<p>準備するもの ①おはな歌のCD ②おはな歌の歌詞カード ③おはな歌のCD ④おはな歌のCD</p>	
<p>時間と活動 ○予想される子どもの反応 ●教師の援助・指導 ○活動のポイント (環境構成も含む)</p>			
10:35	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌を歌う。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。
10:45	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。
10:50	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。
11:00	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。 おはな歌の歌詞を覚える。

図7 4年制大学第一期生の指導計画

北陸学院大学 北6

指導計画 (環境面と時系列への展開)

6月13日(金) 3歳児 クラス名: うめこ 幼児数: 21名

活動 歌とゲーム? ポールゲーム 活動のねらい 友だちと活動する中でポールに慣れさせて

環境面 教師の動き・予想される子どもの姿

子ども

ポールを投げ進め集まってくる

ポールを投げる

実習生

ポールを持って中心に行く

簡単なルール説明

ゲームスタート 全員で ポール投げ

全員で遊ぶが 見ているも出てくる

木葉子を見て全員で遊ぶか 10人11人でわかれて、1つのチームが"地面"に落ちるまで何回か投げた後、もう1つのチームがゲームをする。一交代する。→ 繰り返される

最後は全員でポール投げに遊ぶ?

チーム分けについて、あらかる考えておく

またその場などで

時系列への展開

9:00	10:00	11:00	11:30	12:00	13:00
登園	自由遊戯	朝の集まり	活動終了	昼食	自由遊戯

事前準備 ポール (37)

配慮事項 子どもたちがポールに慣れさせて、前の方の子どもに注意させる。

検閲時期 2人全員で遊ぶ。2つのチームに別れたら

図8 2014年度の指導計画

て書かれている内容は言葉かけを中心としたものが多い。

同じ園での今年度の指導計画が図8である。指導計画の右頁側には、活動内容を「落とさないでね 袋ボールゲーム」として学生が考えた独自の名称で、遊びを計画している。環境図によって、学生が予想した子どもの動線を矢印等で書いている。実習内容としては聞いたことのない活動だが、記号や線を用いて、どのように展開するかが書かれていて、項目や枠にはめたというものとは違って、自分なりに自由にイメージしたことが表現されていると感じられる。実習課題が出されない園では、学生が思考した内容を伝えるツールとして指導計画が使えるようである。

本章では、本学の幼稚園教育実習について、6領域時代と5領域時代にどのような実習をしてきたのかを検討した。実習園から出される課題には、6領域時代の領域に対応した活動とみられる『社会研究』『自然観察』『音楽リズム』などが、5領域時代にも続いてきたと考えられる。また、指導計画については、「言葉かけ」等の保育者の話し方や進め方を学ぶことを重視することを継続してきたと考えられる。

V. おわりに

幼稚園教育要領は平成元年の改正で大きな変更を行い、指導計画の捉え方も変わっている。しかし、IV章で見たように、それに伴って実習内容が深く検討されることはなかったようである。本学の所在市は保育所に比して幼稚園が少なく、各幼稚園は県外の養成校で学ぶ学生の実習も含め年間を通して数多くの実習生を受け入れている。その中で今日に至るまで幼稚園現場の実習イメージがあまり変化していないということは、本学のみならず多くの養成校が平成元年改正幼稚園教育要領が示した幼児教育と保育者像に沿った保育者養成の在り方を現場に示してはこなかったということであろうか。見直しは、文部科学省から示される免許状取得に必要な授業科目の変更に留まっているのが実情かもしれない。

既に四半世紀が経過した。6領域で指導計画が組まれていた当時からほとんど変わらない現

場での実習であれば、学生が新しい授業科目で学ぶこととの乖離は小さくない。現場からは以前の実習生との比較で「態度」と「技能」についての指摘や要望が多く寄せられ、養成校はその対応に追われてきた。「態度」や「技能」には、文化の問題が深くかかわってくる。幼稚園現場が戸惑う実習生の服装や挨拶の仕方、あるいは掃除・洗濯・調理等に関しては、幼稚園の文化と学生の日常生活文化の著しい隔絶がある。園児に混乱を与えないように実習生には実習園の文化に沿うことを確認するが、実習園からの指摘、要望への対応に養成校が実習指導の多くを費やすことで、「園の先生から指摘を受けないように」という実習像を学生がもち、担当保育者の表情ばかりに目がいく実習につながってきたように思われる。一方、実習する活動は、パネルシアター、園で日常的に行われているフルーツバスケットのようなゲーム、行事にちなんだ製作といった無難な活動で実践し、スムーズに進行する技能の習熟が問われる実習が一般的なようである。個々の活動でのスムーズな進行が求められるだけで、生活や遊びの連続性について現場で考える機会とはならない。しかし、現行の幼稚園教育要領が語る子どもの遊び、学びの源泉となる遊びは、保育者が主導し、スムーズに進めて終わるようなものではないはずである。

筆者らは、幼稚園教育実習が、自ら考え工夫した遊びの実践を通して「幼児の遊び=学び」であることを学生が体験的に理解する場となるよう模索してきた。現行の幼稚園教育要領に至るまでに込められた幼児教育の先人たちの思いに応える保育者養成でありたいと願うからであり、4年間という時間に期待するからである。具体的な仕掛けの一つとして考えているのが実習生の指導計画の様式である。自らの遊びのプランに基づく指導だからこそ、計画を幼稚園に伝える必要が生じるのであって、進め方が決まっている内容をスムーズに進めるための覚書は指導計画とは呼べないと考えている。幼保一元化の流れに翻弄される感の昨今の幼稚園をめぐる状況にあって、幼稚園の保育者一人一人が自らの保育、自園の保育、幼稚園教育を、保護者に、そして社会に向けて発信することが求められる。

一人で担えることではなく、協働¹²⁾が求められる。保育者は発信力と協働性を高めることが必須となっている。実習生の指導計画をめぐる実習協議は、現場保育者にとっても、遊びを語り保育を語る場となつて、周りの人たちと育ち合う協働性を保育者が身につける場となるはずである。現場保育者の資質向上にも貢献する幼稚園教育実習を構築したいと願うものである。

<注>

1) 詳細は、大井佳子・吉田若葉「4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案(1)―幼稚園現場との協働の模索―」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 第5号 2012年で実践報告している。本プログラムのプレ実習は、本実習の前の事前学習、あるいは幼児とかかわる体験を多くもつといった一般的な目的のものではない。プレ実習と実習を通じて複数の幼稚園を体験することと、夏季預かり保育という今日的な課題に取り組む幼稚園の姿に触れることで、幼稚園というものをより総合的に捉えられるようになることがめざされている。

プレ実習		実習Ⅰ	プレ実習		実習Ⅱ
幼-1 プレ実習	幼-2 プレ実習		幼-3 プレ実習	幼-4 プレ実習	
1年次 8月5日間	1年次 9月5日間	1年次1月5日間	2年次 8月5日間	2年次 (2・3月)	3年次 6月15日間
実習Ⅰ実習園 以外の幼稚園	実習Ⅰ 実習幼稚園	キリスト教幼稚園	幼-1プレ実習 幼稚園	実習Ⅱ 実習幼稚園	

2) 2012年度幼稚園教育実習Ⅰプレ実習(1年次学生)で用いた記録様式
時系列、環境図、エピソードの3つの記録を書き、環境図については2つの場面について記録する。

3) 一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会『平成

25年度 専門委員会課題研究報告書「保育者の専門性についての調査―養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み―(第2報)』2014年、一般社団法人全国保育士養成協議会、159-163頁。

4) 幼稚園教育要領は、1956(昭和31)年に、保育内容を6つの領域「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」として刊行し、その後1964(昭和39)年に改訂されたが、保育内容の領域は同じく6領域であった。しかし、1989(平成元)年には、保育内容が5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」と改正された。本稿では、幼稚園教育要領の保育内容領域の変遷によって、1956年から1988年までを「6領域時代」、1989年以降を「5領域時代」と呼び、実習の歴史について述べることとする。

幼稚園教育要領の6領域時代については、文部省『幼稚園教育百年史』1979年、ひかりのくにを参照し、平成元年以降5領域時代については、森上史朗他『幼稚園教育要領解説(平成元年告示)』1989年、フレーベル館、及び、森上史朗他『(平成10年改訂)対応 幼稚園教育要領解説』1999年、フレーベル館、及び、文部科学省『幼稚園教育要領解説』2008年、フレーベル館、を参照した。

5) 虹釜和子氏は2014年(平成26)年10月1日、佐々波秋子氏は2014年(平成26)年10月2日に、授業「保育学」で学んだことと、実習園でした実習の内容について、筆者(熊田)が聞いている。

6) 文部省『幼稚園教育百年史』1979年、ひかりのくに、661頁。

7) 文部省『幼稚園教育指導書・領域編 自然』1970年、フレーベル館、4頁。

8) 1991(平成3)年指導計画では、北陸学院短期大学保育科41回生より、実際に使用したものを添付した。

9) 2001(平成13)年指導計画では、北陸学院短期大学保育学科51回生より、実際に使用したものを添付した。

10) 2008(平成20)年指導計画では、北陸学院短期大学保育学科58回生より、実際に使用したものを添付した。

11) 2010(平成22)年指導計画では、北陸学院大学人間総合学部幼児児童教育学科第1期生より、実際に使用したものを添付した。

12) 本学のある石川県私立幼稚園協会はイベントや研究が活発で、優れた協働性を有している。未就園児と保護者対象のイベント「幼稚園ってどんなところ?」では、

数年前から県内の養成校の学生をスタッフとして巻き込み、保育者と学生が協働して企画、準備、当日の実践、振り返りまでを行う機会を提供している。

